様式２

審議会等会議録

審議会等の名称	令和５年度山口市総合教育会議
開催日時	令和　６年　１月２９日（月曜日）１３：３０～１５：３６
開催場所	山口市役所会議室棟Ａ会議室
公開・部分公開の区分	公開
出席者	山口市長　伊藤　和貴 山口市教育委員会 　教育長　藤本　孝治 　委員　　山本　晃久 　委員　　佐々木　司 　委員　　横山　洋之 　委員　　佐藤　真澄 　委員　　角川　早苗 　委員　　鮎川　友子 山口市立仁保小学校　校長　山田　英二 山口市立仁保中学校　教頭　山本　英子 山口市立平川小学校　校長　山本　純也 山口市立平川中学校　校長　横沼　潤一
欠席者	なし
事務局	総合政策部長　吉村　計広　　総合政策部次長　高村　永悟 企画経営課長　宮原　尚規 こども未来部長　藤井　正治 教育部長　宮崎　知彦　　教育部次長　上野　浩和 教育総務課長　石川　暁男　　教育施設管理課長　平井　健 学校教育課長　右田　俊博　　社会教育課長　内田　英司 学校教育課主幹　中田　健一
議題	【次第】 １会議 （１）市長挨拶 （２）会議 　ア　取組説明 　（ア）山口市の小中一貫教育（学校教育課） 　イ　小・中学校における小中一貫教育の取組 　（ア）仁保小学校・仁保中学校 　（イ）平川小学校・平川中学校 （３）意見交換

内容	会議開会（１３時３０分） ○宮崎教育部長 　それではお時間がまいりましたので始めさせていただきます。ただいまから令和 5 年度山口市総合教育会議を開催いたします。この会議の進行を務めさせていただきます、教育委員会教育部長の宮崎と申します。どうぞよろしくお願いいたします。まず、はじめに今回の主催者でございます、伊藤市長が御挨拶を申し上げます。 ○伊藤市長 　皆さんこんにちは。まず、会議に先立ちまして一言御挨拶を申し上げます。 ～挨拶～ ○宮崎教育部長 　ありがとうございました。続きまして、出席者の御紹介をさせていただきます。 　本日の出席者につきましては、時間の関係上、大変恐縮ではございますがお手元に配布しております名簿にて替えさせていただきたいと思います。どうぞ御了承ください。 　それでは、早速会議に入らせていただきます。本年度のテーマは、小中一貫教育でございます。これについて学校教育課から小中一貫教育について、御説明いたします。その次に仁保小・中学校及び平川小・中学校から、小中一貫教育の取組についてお話をいただき、その後、意見交換に移りたいと思います。それでは、最初に学校教育課から説明をお願いいたします。 ○中田主幹 　私からは本市が今年度は試行研究期とし、来年度から実施いたします、小中一貫教育についてお話をさせていただきます。 ～小中一貫教育の説明～ ○宮崎教育部長 　ありがとうございました。それでは続いて、仁保小・中学校における、小中一貫教育の取組についてということで、山田校長先生、山本教頭先生、御準備の方をよろしくお願いいたします。 ○山田校長 　仁保小・中学校の取組を発表させていただきたいと思います。

	○山本教頭 　それでは、仁保中学校区、１小１中で取組んでおります、小中一貫教育について、山田校長先生とともに紹介をさせていただきます。 ～仁保小学校、仁保中学校における小中一貫教育の説明～ ○宮崎教育部長 　ありがとうございました。それでは続きまして、平川小・中学校における、小中一貫教育の取組について、山本校長先生、横沼校長先生、どうぞよろしくお願いします。 ○山本校長 　平川小・中学校における一貫教育の取組について発表いたします。 ～平川小学校、平川中学校における小中一貫教育の説明～ ○宮崎教育部長 　ありがとうございました。写真や動画も混ぜていただきながら、現場の様子がよくお分かりいただけたのではないかと思っています。 　それでは、これより意見交換の時間とさせていただきたいと思います。お時間は大体 40 分ということで、3 時半くらいを目標にというふうに考えております。それでは、それぞれの御説明をいただいたところで、皆様からの御意見等をお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。どなたからでも御発言をよろしくお願いします。 ○山本委員 　いい発表をありがとうございました。素晴らしい発表で、実践が随分進んで、終わりに近づいているのではと…。話を聴けば来年からということで、素晴らしいなと思うのですが、恐らく、その中で校長先生のリーダーシップというか、そのあたりで随分学校の先生方をリードしていかなければ、これだけの実践はできないと思うのですが、課題の中にありましたように、教職員の理解、これは、私は１番苦労しておられている点ではないかなと思うのですが、実際に今、平川中学校さんでも、広がりがまだ一部の教員でしかないという話でしたけれども、大体、どれくらいその理解がなされているものなのですかね。パーセンテージで言うというのもおかしい話なのですが。 ○横沼校長 　実際に中学校の教員が３名行っていますけれども、学年としては２年部の教員が２名と３年部の教員が１名行くようになっています。当然、その学年は、その

	先生方が行かれることによって、その間の授業はかなり負担が増えるわけなので、そこへの理解ですよね。当然、どういうことをするかというのを、その先生方に丸投げするわけにはまいりませんので、我々が授業を時々のぞきに行くことはもちろんのことですが、その授業づくりの段階で悩まれているところには、積極的に声をかけて、一緒にこうやってみようかとか、こういうふうにしたらとか、それから報告を受けながら、その職員室の周りに座っている先生方に聞こえるように意識をしてやっていく中で、行ってよかったという話をできるだけ、該当の教員から引き出すような形にしているところです。職員室は３０名いるくらいですけれども、そういったところから、地域に連携する活動とか、そういったものに対する、拒絶感のないような雰囲気づくりに向けて、日頃から声をかけていますので、あとはそこをどう他の先生方が授業改善に活かしているかというところはまだまだ必要かなと今、思っています。 ○山本委員 　この課題は、今のままでいくといつまでも続く課題であろうと思うのですが、我々の仕事にはならないかもしれないけれども、ゆくゆくは制度的な体制づくりというか、その辺も一緒に考えながら、これは文科省の仕事になるから、我々はどうこう言う話ではないですけれども、小中の一貫で一体型の学校というのは、ずいぶんと成果をあげているというふうに聞きますから、そういった成果をあげるという中でも、制度的な設計というのは、今からは大事になってくるのではないかなと、そういうことも目指して、小中の一貫の教育を図りながら、やはり課題として整理してほしいということなのだろうと思います。ありがとうございました。 ○宮崎教育部長 　ありがとうございます。仁保小・中さんの方で、今、山本委員さんの教職員の皆さんの理解を、というあたりで、言及があればお願いします。 ○山田校長 　平川小・中さんとは違って、仁保小・中は、アットホームで小さな学校で、いいことに昨年度と今年度、教職員が、ほとんど入れ替わりがありません。昨年度から始まった時には、先ほど言われたように小学校と中学校、文化の違いというのはやはり小さい学校でもあります。時間のずれとかもあります。ですけれども、それを中学校の先生がリーダーシップを発揮されながら乗り入れ、まずは無理なくやっていく。先ほどアンケート調査とかで出したと思うのですけれども、それとか子どもの姿、声を聴く中でやってよかったというのが徐々に浸透していった、そういうところがあるのかなと思います。隣にいる山本教頭先生、体育の先生なのですけれども、陸上記録会があった時に６年生のハードルを指導してく

	ださいました。タイムがぐんぐん伸びまして、それを見て小学校の担任の方も専門的な指導を受けると、そのメリットを感じるというのがあるのかなと思います。あとは制度的なことで、そうは言ってもゆとり、さっき平川小・中さんの方で話を聴いた加配がいるというのは大きいなと思いました。その辺の制度設計というところは、ここだけではなくて県とか文科省、そのあたりを考えてくださると随分また進んでいくものではないかなと思います。 ○宮崎教育部長 　その他ございますでしょうか。鮎川委員さんお願いします。 ○佐藤委員 　感想なのですが、先ほど山本教頭先生の発表の中にあった、手段ではなく目的であるというフレーズをどこかで聞いたなと思ったのは、やはり ICT 活用の時にも同じような話が出ていて、この会議でもその話が出ていて、以前は、今日は ICT を使いますみたいなふうだったのが、今は文房具のひとつとして日常的に使われているので、きっと小中一貫ということもそのうち当たり前になっていくというか、今日は小中一貫でやりますではなくて、日常的に取り入れられるものに変わっていくのではないのかなと思っていて、そのためには ICT の時と一緒のようにハードルが下がることが大切なのかなと思ったりしています。例えば、山田校長先生が話した持続可能というところにも通じるのですけれども、日課表に入っているとか、平川中のカリキュラムみたいに見える化することによって、先生方の取組がしやすくなっていって、ハードルが下がるのかなと思ったのと、ハードルが下がるもうひとつは専門性が低いと言ったらあれなのですけれども、参加のしやすさ、平川の挨拶ロードのところもそうだなというふうに思っています。私自身、平川小・中の前が通勤路なのですけれども、校長先生らが立たれているのを拝見して、最初、小学校の前を通っているはずなのに、パッと見たら中学生がいたりとかしていて、なぜだろうと思ったのですけれども、やはり平川での小中一貫の取組ということかと思って、挨拶運動に参加するのだったら地域の人たちももちろんですし、コミスクも一緒だと思うのですけれども、参加のしやすさ、専門性の低さというところからスタートすると、もっと日常的になっていって、小中一貫のいろいろな学校での取り入れ方があるのではないかなというふうに感じました。勉強になりました。ありがとうございました。 ○宮崎教育部長 　ありがとうございます。ハードルを下げるというようなところで、山本校長先生何かありますか。

	○山本校長 　ありがとうございます。見ていただいて、本当にお声がけいただいて、私自身はすごく励みになりますし、私が知り得たことは当然、教職員にも話しますし、子どもたちにももちろん皆さんの姿を見ている地域の方、いろいろな地域以外の人も見ていて、そうやってお声がけくださっているのだよということがすごい嬉しい。特に中学生なんかもこの前セミナーパークで中学生が発表する機会があったのですが、やはり、挨拶をしていることにメリットがあるというふうに中学生が感じ始めていますね。以前、市長さんのところにお伺いした時に小学校６年生の防犯につながると言いました。私はびっくりして、それが印象に残っていて、ある地域の方、見ていた方が、挨拶の目的は何かと中学生にズバリ聞いたのですよ。しどろもどろしていたら、その地域の方が、敵か味方を見分けると言っていたのですよ。とても殺伐とした言い方だなと思って、その後補足されたのは、要するに挨拶を返してくれる人は皆さんのことを受け入れようとしている人、返さない人はまだ距離がある人なのだというような意味合いで言われました。それもすごく参考になりましたし、そういうのを含めて平川地域が今言っていただいたように、できることから取組を始めようとしてらっしゃる地域の方もいるということです。大変心強いので、挨拶以外にも何かできることをこれから探していきたいなと思っています。ありがとうございます。 ○山本委員 　グランドデザインというのが、今からできるのですか。 ○右田学校教育課長 　グランドデザインにつきましては、今年度は試行研究期の中で資料を作っていただいておりまして、この４月からそれに基づいて実施ということで、各中学校区で今、取り組んでいただいております。 ○山本委員 　何が言いたいかというと、グランドデザインがあるということは、市教委が求めている１年間の教育計画の１番頭にマニフェストというのがついていますよね。あれはいらなくなると理解していいでしょうか。 ○山本校長 　大きなことなので、それぞれの中学校区ごとで、それぞれ特徴を持ってやっていただいているので、全部の中学校区でできていますよね。 ○右田学校教育課長 　はい、そのようになっております。

	○山本委員 　それは学校によって特色があるので、当然中身は違いますよね。だから、共通した項目ではないので、また、マニフェストとは若干ニュアンスが違うと思うのですが、それと、そのグランドデザインを１枚の中にものすごい情報量ですよね。これをいかに地域、あるいは教員にアピールというか、していくかという問題で、この情報量の多さをどう取り扱ったらいいのかなというのはひとつ、今からの課題にしてほしいかなと思います。 ○中田学校教育課主幹 　それでは、わかりやすくするために、先ほどお示ししましたプレゼンシートを別で作成しておりまして、本当に一目瞭然という形で端的にまとめていただく、これは例がいろいろ書いておりますけれども、その中で必要なものをプレゼンシートの方にできるだけ作っていただくようにしております。 ○横沼校長 　これはまた、いろいろ保護者説明会でいろいろなところで浸透するようになっていますよね。できて終わりではなしに、いかにそれでこれから情報発信していくかが問題だと…。 ○山本委員 　そこがポイントですよね。 ○横沼校長 　多分、いろいろ今から学校だよりとかの中で、いろいろ情報も小中一貫ということで話をしていくことになろうと思います。 ○山本委員 　もう１件そのグランドデザインで、いわゆる６・３制が今、学校の都合によって、５、６、５と１１、１２をひとつの中間層という方法がありますが、その辺は各学校にもはせてあるということですね。 ○宮崎教育部長 　まずそのあたり仁保中学校さん、なにかありますか。山本委員さん、言われる６・３制の区切りである。もうひとつ大変なのは地域の方々とのグランドデザイン共有であったり、そういうお話ありましたけれども、仁保における地域の方、教職員との目標の共有にどういうふうに取組まれているのかなと。

	○山本教頭 　本校学校運営協議会を年間６回開催しております。昨年、５回でしたけれども、今年度１回増やして、６回ということで２ヶ月に１回行っているということでございます。ほとんどの委員の方に御出席いただいていますけれども、その中でいろいろ子どもたちのことについて話し合いを行われたり、情報提供していただいたりという感じで、グランドデザインそのものを見ていただいてというようなことはございませんが、子どもを育てたいということについて意見を交わすというような機会はたくさん設けております。また、学校運営協議会を開催するにあたって、その前段階で授業参観をしていただくということ、実際に子どもたちの様子を見ていただいた上で、学校運営協議会に臨んでいただくということで、子どもたちのことについてしっかり話し合いを行えていると思います。グランドデザインについては、具体的に委員の方と、地域の方とお話をする機会は、今のところは持ってはないのですが、また次年度への課題というふうに捉えております。 ○鮎川委員 　小中連携の今までの活動のベースがあって、そしてその先にと言いますか、少し広げた形で小中一貫教育の方に取り組まれているという、そのあたりも取組み方、その先生方にもやりやすかったのではないのかなと思いながら拝見させていただきました。これから本格的な取組をということでいらっしゃいますけれども、市内の小中学校のいろいろな取組、地域性もありましょうし学校規模もありましょうし、１小１中の学校もあるいは複数の小学校を抱えている中学校もありますので、そのあたりをまた何かの機会でお互いに情報交換をしながら、取り入れられるところはまた無理のない形で取り入れられて、山口市としての小中一貫教育というのが、広がっていけばいいなというふうに思っております。今日の４校の御発表それぞれとても素晴らしかったのですけれども、そういうふうに活動しながら、狙いを外さないで見ておられる、活動ありきではなくて、子どもたちのための小中一貫教育という、そこのところを常に意識しておられるということも、これはやはり素晴らしいことだなというふうに思いました。それからまた、中田指導主事さんの方で御発表の中にあったのですけれども、本物の学力を育む授業づくりというのを、テーマに取り上げられていたのが二島中学校区だったのですけれども、お話を聴いていて、私がイメージしただけなので実現できるかどうかというのはわかりませんけれども、教員の負担軽減というふうに言われているのですけれども、小中連携とか研究授業というときに、そのためにとても時間を割くようなことがあります。指導案とか授業づくりとか、あるいは、小学校、中学校互いに研修会でというふうな、そういうところは、例えば、授業スタイルが小中で１本化されていると、もちろんその小学校１年生の授業パターンと、それから中学校３年生ではだんだん深まりができてくるのだろうし、複雑にもなってくるかと思いますけれども、そういうパターンもあると、子どもたちも授業の中で

	何をどういうふうに考えていけばいいかとか、あるいは教員の方も、このパターンに乗せて授業づくりをしていくということがあると、また、少しは時間の軽減にもつながるのではないかな。そんなことを思いながら拝見させていただきました。また、これからも進化と充実に期待をしたいと思います。どうもありがとうございました。 ○藤本教育長 　平川とか、授業づくりをいろいろ１本化していませんか。 ○山本校長 　ひとつは言語能力というふうに言っているので、対話活動の充実というのは図っていて、今回、中学校さんは道徳を指定で２年間受けられて、地域の方も一緒になって交流するというふうに言っているのですけれども、小学校は割と、従前から、対話というのは学習指導要領で言われているけれど、それがベースで、その深まりというところに小学校の課題があるというか、それをまた中学校さんと共有して、言語能力を育てるというのは当然、インプットのみでは終わらないという、アウトプットあって初めて言語能力が高まってきていくという認識が共通理解していますから、その目的と活動がセットに学習指導ですね。そうなっておくと教員がやりやすい、そういう認識を先ほど、教育部長が言われたけれど、もっとこう徹底しないといけないというのは課題ではある。当然、まだばらつきがどうしても授業の中でありますので、そこは徹底していかなければいけないなと思っています。 ○横沼校長 　それと先日より山本校長とよく話をするのですが、授業スタイル、今おっしゃったように、そろえることは、実は非常に難しくて、というのは、やはり、授業というのはその先生の個性が、これまで培ってきたものがありますので、急にこういうスタイルにしろと言われても変えられるものではない。しかも市外から転勤して来られる先生もいらっしゃいますし、ある意味、形をそろえるということによるストレスがまたそこに出てくる可能性があると、ただ、今年道徳をやってみて、実際に公開授業でいい授業をしようと思ったら、何がいるのかと最終的に教員と協議した時に、その授業でいいものをいい授業するための準備がいるのですが、その準備が、実は教師の準備もですが、子どもも準備がいるのですよ。子どもの準備って何かといったら、明日こういうことをやるから自分たちでどれだけ資料を持ち寄っていい議論をする授業に持っていくかとなると、タブレットを持って帰って自分たちで調べてくるという家庭学習をするような形、これはひょっとしたら小学校低学年の時に意味調べをするところから始まっているわけですから、それをぜひ中学校までつなげていくというような仕組みを取る。だから授

	業もですけれども、家庭学習のやり方というのが、実はそろっていてバラバラなので、そこをそろえていくということは、実は小中一貫で非常に重要なのではないかということを先日お話しました。 ○角川委員 　６月と１１月に毎年、学校訪問をさせていただくのですけれども、その時に大体の学校さんで、うちの学校の生徒は自己肯定感が高いですと言われる方はほぼなくて、いつも大体、課題としてあがってくるのは自己肯定感の低さということを言われています。それを高めるにはということが課題なのですけれども、今日、まず仁保小・中さんのアンケートを見てすごく驚いたのですけれども、自己肯定感、自分に自信が持てるところが、よいところがあると思うというのが、すごくアップしている。これが小中一貫教育による成果だとすれば、本当に小規模校や大規模校でやることはそれぞれだと思うのですけれども、素晴らしいなと思いました。それで、仁保小・中さんの子どもたちのアンケートで、小学生が中学校に上がるときの不安がすごく中学生になっても、普通だったら少し不安だなと思うことが多いと思うのですけれども、そうではなくて、中学生になっても頑張りたいと言われたことや、中学校のアンケートで頑張っている姿を見てほしいという、小・中の乗り入れ授業によるアンケートでそのような回答が小・中学校であったことが、不安とかそういうことではなく、すごくポジティブな回答が多かったのがその自己肯定感によるものなのかなという、そういう結果なのかなと思ったことと、平川小学校、中学校でされている、ひらこやもすごくいいなと思ったのが、今まで先生が乗り入れ授業とかそういうこともいいのですけれども、こうやって生徒同士が、中学生が小学生を支援することによって、中学生がすごく自分に自信が持てるのではないかなと思います。多少自信が無い点も、小学生に教えることにより、自分がそういうことができるということや、小学生が頑張っている姿を見て、さっきも言われていた自分も頑張らければと思うことが、すべてプラスになっているのかなと思ったので、それぞれできる規模によってもいろいろあるとは思うのですけれども、素晴らしいなと思って聞かせていただきました。そういうことで課題はたくさんあると思うのですけれども、すごい成果が今、たったこれだけの期間で出ていることを、いろいろないいところを他の小中学校にもどんどん発信していっていただきたいなと思いました。ありがとうございました。 ○山本委員 　免許のことなのですが、小学校、中学校で私が現場に、よく身上調査書ありますよね。あれにいわゆる副免を書くのに、小学校の教員だったら、あまり中学校の免許証を書きたくない。なぜかというと書いたら、いわゆるそこに行かされる、利用されるとか、そういう負担は覆いたくないから書きたくないという教員が、１５年前の話ですけれどもおられたのですか。今は小中一貫を実施する、実践す

	る上で副免というのは役に立っているものですか、それともそれは関係なく、小中一致ですかね。それができるものなのですかね。 ○山本校長 　必ずそれが役に立つかどうかというのは不明なのですが、実際に私が経験したのは、平川小から平川中に異動というか、そういう小中連携の県の事業ではないのですけれども、異動した教員がいて、それがまた平川小に戻ってきたのですよ。その者は社会科の免許を持っていました。そういうのは小学校教員で、その教員に聞いたらよかったと言って、中学校というものを知って、中学校の文化、生徒指導の在り方、組織的な対応の在り方というのは小学校と違うというのを実感している。当然、部活指導もやっていますから、その辺の指導の在り方までは、ただ、それは特異な例で、日頃から小学校の教員が中学校免許を持っていて、何か中学校との関りでというのは、あまり実感としてはないですね。ただ、小学校と中学校、小中連携の時にどうしても免許状が専門性を表す内容が多いので、それも自分で意識していますから、その免許状によって、さっきの一貫カリキュラムのところに、例えば、英語免許を持っているから外国語部会で自分はもっと専門性を高めていきたいと、自分自身の研修の柱にはなっているのは事実なのです。全員が全員ではなくて、そういう意識は、小学校教員はあります。それが中学校に直接影響しているかと言ったらはっきりとは言えない。先ほど言われていた、隠すと言ったら言葉があれですけれども、免許を持っていること自体というのはそんなに今の小学校教員は、特にそれにこだわりを、書きたくないとか、あまりそういうのは目にしたくないというのは聞かなくなったという気はします。私の知る限りですけれども。 ○山本委員 　この免許のところに一貫教育が進んでいったら、いろいろ究極的には義務教育学校になるでしょうから、そうなると免許そのものも、小・中で分けるのでは無しに、義務教育学校免許みたいなのが、今から生まれてくるのかなと思いながら話で言っただけです。ありがとうございました。 ○横沼校長 　直接は関係ないかもしれないですけれども、先ほどお話した小・中学校の文化の違いということで、私、かつて、小学校の教員、中学校の教員が同じ職員室にいる学校に勤務していたことがあるのですが、明らかな文化の違いは小学校の先生、小さい学校だったから特にそうですが、小学校の先生は空き時間が全くありません。中学校の先生は教科担任制なので、空き時間があります。ただ、それには中学校の教育にその後、放課後、小学校の先生が教材研究する時間に部活動の指導が必ずあるので、そこでバランスが取れる。ところが今後、もし、部活動が

	なくなると、その不満はどこで解消するかというのは、私はすごく大きな課題として思っていますので、今、山本委員さんが言われたように、ひょっとしたら、小中一貫をやるのであれば、すべて小学校低学年から中学校 3 年生まで教えられる教員というのは、これからは望まれるというか、求められる資質になってくるのかなと、それが理想だと思います。そうでないと、お互い理解するのに時間ばっかりかかってしまい、すべてを理解した教員が全員であれば、1 番手っ取り早いのではないか。そういうふうな制度に代わっていく可能性はあるなと思っています。 ○佐藤委員 　そのことに関連してなのですが、私自身、大学の教育学部で働いて教務を担当しているのですが、２年前に免許法が改正されてからは、明らかに免許併用を国が進めているので、ほとんどの学生が免許併有、小学校で中学校を必ず取るとは限らないのですが、小学校は必ず幼稚園と合わせて取るとか、中学校は小学校と合わせて取るということはかなり進んでいて、県によってはそのことによって採用試験も有利だったりとかするので、進めているのですが、一方ではすごく併有することのハードルが下がっているので、例えば実習はどちらかだけでやっていたりですとか、教科については今まで必修だったのが必修ではなくなったりとかという形になっていて、必ずしも、免許を併有しているから、中学校、小学校の文化、例えば実習とかで知っているかと言われると、それは大きく減退しているのかなというのが、本当にこんなので免許両方持っていると言えるのだろうかというような、現状があったりとか、すごくそこら辺は矛盾しているなというのを感じたりしています。 ○山本教頭 　先ほど小学校教員が中学校にというようなお話がありましたが、私、実は前任校が小学校でした。教頭として初めて勤務した学校が小学校ということで、中学校籍ですけれども、小学校免許を持っていたということですが、小学校に勤務した経験は一度もございませんでした。大変戸惑いながら２年間過ごしましたけれども、そこで小学校文化とか言われますけれども、中学校とは違う雰囲気、いろいろなことが、感じがありましたけれども、それも大変いい勉強になりました。それを 2 年間過ごしまして、中学校に戻ってきているからこそ、今、小中一貫教育が少しスムーズに行けたのかなというふうに感じています。昨年 4 月、山口に戻りました時に、本校、藤田校長から、乗り入れ授業をやろうと思うのだけれどもというような提案がありまして、それはいいですねということで導入をいたしました。中学校から小学校にということですが、そういった中で、先生方行ってくださいではなくて、私自身、毎週 2 時間行っております。管理職が率先して行くことによって、先生方も行こうかというような気になってもらう。最初は戸惑

いが多かったと思います。どうして中学校教員が小学校に行かないといけないのというような声もやはり聞こえたのが事実でございます。ですが、私自身は小学校の雰囲気と中学校の雰囲気とが違うということはよくわかっていましたし、そういったことを分かりながら、参考させていただいたということで、少しずつ小学校の先生とも話もできましたし、１年、２年終えようとしていますが、そういったところで私自身は、大変効果があったのではないかなというふうに思っていますし、その成果について、他の先生方にもしっかり広げていきたいなというふうに感じているところです。

○横山委員

すいません。今日お話しお聞きしまして、学校という言葉と勉強という言葉を除けるとすごい子ども会に期待されることが多いなと感じていて、実際に異年齢集団ではありますし、幼稚園から中学校までの全体の集まりです。父兄の立場で言いますと、精神的に小学校から中学校にスムーズに移行するためには、異年齢で活動して、上のものが下のものを世話するとか、そういった形の社会教育というのはすごい大事だと思います。ちなみに小郡では、小郡ウイークエンドアドベンチャーいう仕組みがありまして、もう２５年間やらせております。旧小郡町時代からやりまして、山口市になってからも市の補助を頂きました。ありがとうございます。そこで、毎月やっているのですが、最初学芸大の生徒たちがお手伝いに来てくれました。その後、鴻城高校の野球部の子どもとか、一般の子どもたちに来てもらって、おととしぐらいから小郡中学校の生徒も来てくれています。去年からは松風館高校ができましたので、松風館高校と山口大学の生徒がボランティアで自主的に来て、全体で小郡が３校小学校ありますので、その横のつながりもありますから、一つの小郡の中学校に行くというのがあるので、少しは役に立っているのではないかと考えております。仁保地域、平川地域というのは、地域活動が盛んなところで、子ども会も仁保は山口市子連の会長さんがいらっしゃいますし、平川地域も頑張ってらっしゃいます。そういう関係で、言うなれば、地域との連携というので、お互いに利用し合うというのを言い方難しいですけれども、そういう形で頑張っていただきたいと思いますが、そういうことでなにか考えられていることがあれば。

○山本校長

子ども会は、平川地域もすごい今言っていただいたように盛んで、例えば正月なんかは、しめ縄飾りという子ども会主催で、平川小の体育館に集まっていただいて、地域もしめ縄ができるからと、高齢の方が講師となって、親子で一緒に作るというのをやっています。子ども会行事がたくさんあって、それと子どもが自主的に参加するというか、すごくスムーズにいっていて、この前、子ども会の方が昼休みに子どもたちを集めて、ニュースポーツをやりたいからと言われて、暑

	い日だったのですけれども、熱中症が心配な時期ではあったけれども結構集まって、子ども会の方が、本当に、教員が全く関わらず、そのお 2 人だけですがやられていました。異年齢がそれこそ交わって、その中に子ども会の関係者もいたので、今、言われたように、できることから学校の中を使っていただくというのもありだし、そこで活躍したリーダーというか、子ども会でお世話している高学年の子どもたちがまた活躍する。中学生もリーダーいますから、そういうのを子どもたちがまた、憧れの存在になるというか、平川地域はそういう姿を、私自身がすごく目にしていて、それが学校生活に生きているのではないかなというふうに思っています。 ○山田校長 　仁保の方についてですけれども、さっき言われましたように、子ども会全体の会長さんが仁保地域にはいらっしゃいまして、その方が学校運営協議会委員さんに入っておられます。朝の交通指導見守り隊もされていますので、しょっちゅう顔を合わせながら情報交換をしたりということで、昔から仁保地域は子ども会の行事とか、そういうところも盛んですので、そういう取組情報を得ながらお互いにできるところとか、協力してほしいところとかを共有しながら進めているところです。自然な学習経験ではないかなと思います。 ○佐々木委員 　今日、素敵なものをありがとうございました。数年後の未来を予想するということで、いくつか発言をさせていただければと思います。おそらく、数年後には AI を子どもたちにどう利用させるのかということを、学校で教え始めると思います。実際にやられている学校もあるのですが、その AI 利用で熟議をどうするか、熟議のやり方もそうですが、出てきたアイデアを AI にインプットしてもんでもらうとか、地域の情報なんかも入れこんで、どういうふうな反応が出てくるか、それからアウトプットされたものをそのまま提示するというだけではいけませんので、そこに子どもたちだとか、地域住民だとかの意見が加味されたりということもあるかと思いますが、まもなくそういうことになると思います。それから、熟議そのものはいろいろなところで、山口県内やって、熟議そのものはそんなに子どもたち交えた熟議は珍しいことでは全くないのですが、どうも、見聞きしているとその場でもって、意見そのものを出して、KJ 法などでまとめてというところにとどまってはしないのかというところがありまして、自分の意見をもんでみるとか、ぶつけ合って変容するとか、あるいは自分自身で議論するとかですね。つまり、人がいなくても自分の中で検討してみて、批判的検討を加えた後で意見として述べる。そして、またそこで他の人と意見をぶつけ合って、またそれが変わっていく。そういった中では例えば自分の自尊心みたいなのが傷つけられるみたいなことがあるかもしれませんけれども、それも含めて受け止めていくみたいな

	のが本物の学力になるのではなかろうかと。自己肯定感の話もあったのですけれども、自尊心とか自己肯定感って結構臆病なものなので、臆病な自尊心というのはありますけれども、そういうのを含めて本物の学力が高まっていくのではなかろうか、いってほしいなというような思いを抱いております。以上です。ありがとうございました。 ○藤本教育長 　本当に今日は仁保小・中学校、平川小・中学校さんの取組が、本当に先進的な取組で、よい成果をいただいて感謝しております。今回、すべての校長先生方と面談する中で、多くの校長先生方の成果として、地域連携を全員あげておられました。同時にその小中一貫教育についてもすごく課題があるのを、手ごたえを感じておられるということがいいなというふうに思っています。私たちが今、目指している究極の教育目標というのは、子どもたちの幸せの実現であって、そして、これからの時代、生きていくためには、自立した学習者をどう育てていくかというのが大きな課題かなというふうに思っています。本市はその核として、今、本物の学力というのが課題でありまして、その手段のひとつとして今回、コミュニティスクールを基盤とした小中一貫教育というのを掲げておりまして、これが目的ではなくて、あくまでもそのツールであるということでございます。コミュニティスクールはかなり成果も上がってきておりますし、その小中一貫という意味でもまだまだ不登校の子どもたちとか、学びに躓きのある子どもたちがいたりとか、そういった視点もあります。やはり、小中学校で途切れることない地域の支援がひとつ。それから、小中学校の教員がやはり、義務教育学校の教員という意識で子どもたちに関わってほしいということで取り組んでいきたいなと思っております。なかなかコミスクもそうですけれどもすぐ浸透するというのではありませんので、私は修正主義ということで、やりながら徐々に改革をしていって、子どもたちの変容を見ることによって、また教職員の意識も変わっていくのではないかなと思っておりまして、そういったコミスク、小中一貫教育を期待しているところです。以上です。 ○宮崎教育部長 　ありがとうございます。本日はいろいろな御意見いただきましてありがとうございます。予定の時刻とまいりましたので、最後に伊藤市長から一言申し上げます。よろしくお願いいたします。 ○伊藤市長 　今日は仁保と平川という規模感の違う学校の実際の話を聴いて、本当に実は安心をいたしました。元々言い出しっぺで、教育長に何とかこれやってみないというふうに言ったので、どうなっているのだろうと心配しましたけれども、しっか

	り動いている。私の思っていた以上のことが展開されているなというのがひとつありました。小学校と中学校の連携も深まっているし、その相乗効果で地域との距離感も近くなっているという、素晴らしいなと。特に私は仁保の公民館に２２、２３年前に館長を１年間だけやらせてもらっていたので、仁保はすべて家庭の内情まで、全部手に取るように分かるというのが実感で、そういうスモールサイズの地域なので、学校との情報共有をすごい昔からやられていたところが、平川みたいに大きい規模の所はどうなっているのだろうと少し心配したところです。ただ、聞くと子ども会との連携とか、しっかり動いているので、学校、地域、家庭、それが一気通貫でやはりつながっている素地はあるなというところで安心はしたところであります。かくなるうえは山口の子どもたちが、そのシステムの中で、それぞれの夢と希望をしっかり獲得していってくれるような、そういうまた教育環境が生まれるといいなというふうに思ったところであります。今、予算編成真っ最中であります。しっかり、来年からの本格実施に向けてアクセルを踏めるように、予算組織してまいりますので、また先生方、委員の皆様の御支援と御協力をお願いしたいと思います。本当に今日はどうもありがとうございました。 ○宮崎教育部長 　ありがとうございます。それでは以上を持ちまして、令和５年度山口市総合教育会議を終了させていただきます。皆様、大変お疲れ様でした。ありがとうございました。 会議閉会（１５時３６分）